

の世界、赤い生たる人間の世界という構成が基盤にあるように推察された。芸術志向の学生たちにもアジアというより、普遍的な人間的次元における原初的な色彩語彙感覚が看取された(詳細は『印度学宗教学会論集』三八号参照)。

看取りの前後における宗教民俗的な体験・想像・語り

相澤 出

本報告は、在宅ホスピス・緩和ケアの現場において、看取りとその後のなかで、遺族が綴った物語を検討し、在宅の看取りを経験した人々が、その経験をどのように受けとめたかを検討する試みである。二度にわたって実施された在宅ホスピス・緩和ケア遺族調査の自由記述をみる時、そのなかには、医療化され、その意味を医療的な死亡診断(死の三兆候などが確認される生理学的な死の瞬間)へと切りつめられた病院死とは異なる死のあり方が語られるケースが珍しくなかった。

いかえれば、この世との別れを、亡くなっていく人(在宅緩和ケアを利用した患者)と、それを見守る(そして見送った)周囲の人々との関係のなかでは、点ではなく長い時間的な経過としての看取りが今なお体験され、それをめぐる多様な物語が紡ぎだされていることがうかがわれた。その体験には、いわゆる宗教民俗的なものとの接点をもつものも含まれていた。これらの記述に注目し、それがどのような物語であるのか、どのような体験がなされ、語られ、記憶されているかを検討することを試みた。

本報告のもととなるのは、二〇一一年一月二三日から三月三

一日にかけて、宮城県・福島県で在宅ホスピス・緩和ケアをてがける六ヶ所の在宅療養支援診療所の協力をえて実施された調査である。質問紙郵送(全数)調査である。対象となったのは、二〇〇七年一月から二〇〇九年一二月の間に、協力先診療所の在宅ホスピス・緩和ケアを利用された患者の遺族である。郵送総数一一九一のうち五七五票を回収。回収率は四八・三%であった。

今回検討した記述には、病気(今回の調査対象者の場合、がん患者遺族が多い)の告知や発症からはじまり、在宅緩和ケアの開始、看病・介護をしながらの患者と家族の時間のおくり方の様子、臨終そして看取りのあとにまでいたる、それぞれの患者と家族(そして遺族)の間で織り成された、さまざまな体験が詳細に書き込まれているものが多々あった。

こうした記述からまず気付かされるのは、在宅看取りの現場における人々の観察の詳細さ、記述の重厚さである。その観察や記述をうながしたのは緊迫した、濃密な時間の流れと、患者とその周囲の人々の関係性の厚みである。患者と家族の体験は、反芻され、解釈され続けている様子もうかがわれた。

これらの観察者の目は、普段と異なるわずかな、ささいなことも見逃さない鋭いものであり、その記憶はかなり詳細なものである。そこで捉えられる事象には、多種多様な「不思議」とされる事柄が含まれるのも珍しくなかった。しかもそれらは、伝統的な民俗宗教的なものと接点をもちながらも、かなり自由な、型にはまらないものであった。在宅看取りの現場においては、亡くなっていく人、そして亡くなった人を中心としながら、

さまざまな出来事の観察、体験されるとともに、宗教民俗的にも特徴づけるべき想像力が喚起されているように思われた。

看取りの文化考——がん患者遺族の語りにもとづいて——

井藤美由紀

高齢化社会は、現代日本にはじめて生まれた現象ではなく、江戸時代にもあった。年長者を敬い、孝行を「人の道」として重んじる政策をとった幕府は、家長が老親を看取することを重んじる教育や制度を整え、家族や親族のない者は地域社会で看取するように指導した(柳谷慶子『江戸時代の老いと看取り』山川出版社、二〇一一)。その後時代が移つても、日本では長らく、看取りの責を負うのは基本的に家族或いは親族であり、それが叶わぬ場合は地域社会に委ねるということが続けられてきた。

しかし、戦後六十年余りの間に、看取りの場は、家や地域社会から病院の中へと移行し、看取りを取り巻く状況は様変わりした。社会構造の変化に伴い、核家族が増加。家族役割についての考え方も、老いや死との向き合い方も、死と葬送の民俗に対する考え方も、すっかり変わった。人が死に逝く過程に立ち会い、そこで生まれる感情や感覚を、身近な人々と分かち合う。そして、死がもたらす非日常性を、日常生活の枠の中に納めてゆくために、地縁・血縁関係者がこぞって協働する中で、脈々と受け継がれてきた何ものかを、「看取りの文化」と呼ぶとすると、今の日本には、そんなものがあつたということさえ、思い描けない人の方が、多いのではなからうか。そこで本発表では、二〇〇八年に実施した、がん患者遺族へのインタビュー調

査の成果から、後藤富美子(仮名)さんの事例(「お迎え」に関するエピソード)を紹介し、「看取り文化」の現在についての一考察を発表する。

後藤富美子さんは、医師が終末期の夫(啓司さん)に「お迎えが来たらいいですね」と話しかけた時、義父母を看取った時の記憶が甦ると同時に、目から鱗が落ちた。自分が妄想だと思いついていた現象を、「お迎え」と捉えることができる。「科学者である医師」がそう告げていた。富美子さんの語りを辿ると、「お迎え」という概念が、啓司さんと富美子さんがこの世で一緒に過ごす最後の日々を、ほのかに明るくしたことが伺える。また、死別後の深い悲嘆の底から、富美子さんが納得して立ち上がる過程でも、「お迎え」を肯定することで獲得した他界観や靈魂観が、有効に働いたことが伺えた。富美子さんは啓司さんとの死別三年後に実施したインタビュー調査で、啓司さんを看取った後、「魂」の実存を信じるようになり、いわゆる伝統宗教とは違う形であるが、実感を伴う「宗教」を持つようになったと語った。「看取る」という営みには、生と死の境界領域で生きること余儀なくする力が働く。再び生が満ち溢れる日常世界に適応するためには、看取りの文化の中に息づく伝統的な宗教的世界観に一旦深く沈潜し、癒されることが必要なのかもしれない。

「看取りの文化」と言えば、万葉集の昔から、昭和初期まで全国各地で見られた「タマヨビ」は、その代表格ではないかと思われる(井之口章次『日本の葬式』弘文堂、一九七七)。だが現在、「タマヨビ」にリアリティを感じる人は、果たしてど